

アイドルとなります。続いてロンドンでも華麗にデビューしました。オペラをピアノアレンジした技巧的な演奏が受け、時代の寵児となりました。当時、貴族に認められ社交界の花形になることは音楽家にとって最大の出世だったのです。

スイスでも演奏旅行をしましたが、長旅から過労になった父は27年に亡くなってしまいました。この後3年間はパリに母親と住み、ピアノを教えたりして生活し、弟子であった伯爵令嬢カロリーヌとの身分違いの恋愛を彼女の父親に裂かれ、しばらく人と会わなくなる辛い体験もありました。精神的に苦しんだその頃に読んだ文学書や宗教書は、のちの創作の源泉となり、社交界での一流の文人達との交流に活かされました。

ピアニスト兼作曲家として

1830年、7月革命を契機に再び奮起して、ベートーヴェンの「皇帝」の演奏を皮切りに音楽活動を再開しました。ベルリオースの「幻想交響曲」の初演を聴き、以後親しくつきあい、のちにピアノ編曲版を作ります。翌年はパガニーニのヴァイオリンを初めて聴き、その悪魔的な技巧に大変なショックを受け、「僕はピアノのパガニーニになるか、もしくは気狂いになるのだ!」と叫んだといいます。これを期にさらに猛練習し、パガニーニの曲をもとに「超絶技巧練習曲」、後にそれを改編した「大練習曲」を作っています。

No.23: パガニーニによる大練習曲より「ラ・カンパネッラ」

33年、ベルリオースの紹介で、パリの社交界の中心人物だった6歳年上の才媛ダグー夫人と知り合い、文通を通じて間もなく恋愛関係に落ちました。パリで噂になり、いつらなくなった彼女は夫を捨て、スイスに移ったりストとともに35年から同棲生活に入りました。ジュネーブ音楽院で無報酬で教えたり、イタリアの出版業社リコルディに出会ったのもこの頃で、